

優秀賞 [大学生の部]

NRI学生小論文コンテスト2010
日本から未来を提案しよう!
「日本が世界のためにできること」

入賞作品



「いぶし銀国家」や「人材の鍋」といった印象的なキーワードを交えつつ、日本の世界貢献戦略を広い視野で論じた点が高評価につながりました。

「ソリューション輸出国家」日本へ

——未来をデザインする力を

東京大学 法学部4年

鈴木 悠平

すずき ゆうへい

序章

龍馬は答えを与えてくれない

——懐古趣味を超えて、新時代へ

大河ドラマ「龍馬伝」が人気だ。迷走する今日の日本への嘆きと、現状を打破するリーダーや解決策を求める悲痛な気持ち、時代を切り開いた龍馬への憧憬に転化している。だが、幕末と現代では、人口構成、世界情勢、産業構造などあらゆる条件が異なっている。改めて世界と日本の現状認識を固め、この時代に即した日本の軸足と方向性を定めなければ、時代を切り開く力は生み出せない。

日本が軸足と方向性を失い、迷走しているのは、そもそも見る対象たる「世界」が変わったからだ。以前の日本にとっての「世界」とは、ほとんど米国と重なっていたと言っても良い。軍事的安全保障は米軍のプレゼンスに依存し、経済的にも日本の対外輸出の大半を米国の消費に支えられながら成長を実現した。しかし2008年のリーマンショック以後の世界同時恐慌、アフガン・イラクでの軍事ミッションの膠着などで超大国としての米国の権威は失墜し、さらには中国やインド等新興国の台頭もあって、世界のパワーバランスも大きく塗り変わってきている。オバマ大統領自身も相互依存を訴えるように、世界は

「ソリューション輸出国家」日本へ
——未来をデザインする力を

入賞作品

多極化の時代へと突入したのだ。この新たな世界認識のアップデートの遅れが、日本の迷走の根本原因ではないだろうか。幕末とも米国一極時代とも違う、多極化時代の一員として自覚を持ち、日本が世界に貢献するための新たな戦略を描き直す必要がある。(図1)

以下ではまず、世界と日本の課題を概観しながら、日本が優先的に取り組むべき分野と地域を絞り込む。それに基づき、外へのベクトルと内へのベクトル、二つの視点から日本が目指すべき国家像を提案し、最後に実現のためのロードマップを提示する。

第1章

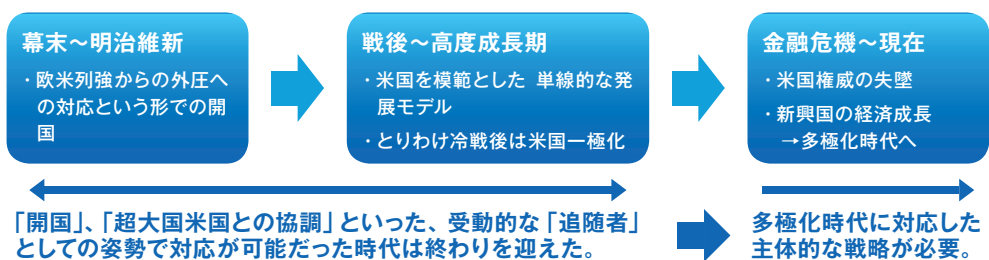
地球規模課題と
「潜在的地球規模課題」、
世界貢献への二つの方向性

地球規模課題、という言葉をよく聞くようになった。グローバル化の進展により密接につながった今日の世界では、一国内で起こった

問題の国境を越えるスピードは早くなり、他国への影響もより一層大きくなった。金融危機、国際テロ、環境問題は最も分かりやすい例だが、各地域を見ても、ソマリアなどの破綻国家、北朝鮮やイランの核開発による核拡散の危険、途上国の貧困問題などに対応することも、各地域や世界秩序の安定に密接に関係する地球規模課題だ。解決には各国が協調して取り組む必要があり、日本もこれらの課題を共有している。

一方で、未だ世界全体で共有されていないが、「課題先進国」¹⁾とも言うべき日本が先んじて直面し、程度や時期の差はあれどいずれ地球大に拡がりゆくような問題がある。環境問題はその一例だった。公害問題と石油危機からいち早く省エネ化・クリーン化に取り組んだ日本の環境技術は世界から高く評価されている。さて、環境問題に続いて課題先進国日本が最先端に行く問題は何か。それは少子高齢化問題である。先進諸国の中で最も高齢化が進んだ日本では、社会保険拠出の増大が歳出増大を招き、高齢者を

図1 日本にとっての「世界」と、その変容



「ソリューション輸出国家」日本へ
——未来をデザインする力を

入賞作品

支える労働力・財源の不足から福祉・医療の危機が予測され、更には将来世代への負担転嫁による若年層の不満の増大が深刻な世代間対立の一因となっている。少子高齢化に加えて、郊外化²⁾、情報化が人間関係の流動性を増大させ、人間関係のフラット化が進展する中、福祉国家が立ちゆかなくなった場合のオプションとしての「大きな社会＝包摂的で相互扶助的な社会」の構築もままならない状況である³⁾。途上国の多くでは未だ人口が増加し続けているが、少子高齢化は成熟国家に普遍的な現象であり、新興国や途上国もいずれ直面する問題であろう。

こうして見ると、日本が世界のためにできることとして、現行の地球規模課題解決への協力と、日本が先んじて直面している「潜在的地球規模課題」の解決モデルをいち早く提示することと、二つの方向性があるように思われる。

それではどこに重点を置くべきか。国家の財政難や不景気という現状を鑑み、取り組むべき範囲を絞り、資源の効率的分配と投入を考える必要がある。筆者は、地域的にはまずアジア、とりわけ東アジアへのコミットメントを最優先とし、現行の課題に対してはソフト面では日本がリード、ハード面では大国とのパートナーシップを重視するという力点の置き方をし、それらの課題も常に国内課題解決との連関を意識した形で取り組むべきだと考える。このことは決して日本の「内向

き化」を意味しない。国内・近隣重視の課題解決は結果的に世界秩序の安定と発展に寄与するし、将来的に更なる地球大のコミットメントを目指すとしても、そのためにまずは内に力を溜め込むステップが不可欠だからだ。以下にもう少し詳しい方向性を述べていく。

第2章

外へのベクトル

——「いぶし銀国家」として東アジアの
多面的安全保障に貢献を

日本の世界におけるポジションを考えるに、外に打って出るベクトルと、内に力を溜め込むベクトル、双方から考えてみよう。まず外へのベクトルとして、東アジアにおける多面的安全保障と持続的発展のために、脇を固める「いぶし銀国家」としての立ち位置を目指したい。地域全体の経済成長のエンジン役は中国、韓国、インドネシア、シンガポールといった新興国が、高度成長の副作用を抑えるための側面支援は日本が担うという役割分担の発想だ。大規模な開発、インフラ投資は新興国がリードし、日本は技術移転や人材交流、医療、福祉、公害防止、教育、災害救助活動、人身売買等犯罪行為の取り締まり、難民支援といったソフトな分野へと重心をずらしていくのである。対外ODAも手法を円借款から技術協力へ、内容はイン

フラ投資から環境整備や人材育成へと力点を移していく方向性が望ましい。例えば、地震や台風の経験を通して積み重ねた日本のノウハウは、東アジアの島嶼部や沿岸部での自然災害における人命救助や復興プロセスにおいて重宝されるだろうし、未だ法の支配や人権概念が十分に確立していない国々に対する教育や行政面での協力は日本の強みだ。

軍事面の安全保障については、北朝鮮の核拡散の危険に対して、多国間で協調して圧力をかけていくことと、中国の膨張を踏まえた上での、米国を含む東アジア地域全体のバランスオブパワーの見直しが重要だろう。後者については日本の普天間基地移設問題も関わってくるが、対米従属か対米自立かといった単純な議論ではなく、藤原帰一が「第三の道」⁴⁾と称したような、日中米の緊密なパートナーシップを模索するべきであり、そのためには日本国内でも、軍事的安全保障に関して日本が東アジアでどの程度の負担と役割を負うべきかを、タブーを無くして議論する必要がある。

いずれにせよ、軍事、経済、環境、社会、人間の安全保障と、安全保障は多面的に考えていく必要があるが、日本は成熟国家としてソフト面での貢献に思い切ってフォーカスすることが有効な戦略ではないだろうか。

第3章

内へのベクトル

——「人材の鍋」としての協働社会の実現へ

内へのベクトルとしては、少子高齢化等の先進課題を乗り越えるために、人種のるつぼでもサラダボウルでもない、「人材の鍋」という新たな社会モデルを提示したい。鍋に入れる具材は、それぞれ単独の食材としても味わい深いですが、一つの鍋の中で素材の共奏が起るとまた一段と味わい深くなる。世代や人種、職業の差異を超えて、同じ鍋＝社会の中で公共圏を形成しお互いにコミットメントし合う、相互扶助的な社会の構築を目指すべきだ。

少子高齢化、郊外化、情報化が人間関係のフラット化をもたらし、人々は世代や嗜好ごとの小さな島宇宙へと分断されるようになった。自己完結的な島宇宙でも、それで構成員が満足しているから良いではないか、と言えるかもしれないが、閉じた、均質な島宇宙は外＝異質な他者に対して極めて排他的だという問題がある。どこにも属せなかった場合に助け合う仲間がいないという、島宇宙からの「はじかれリスク」は、とりわけ高齢者や収入源を失った失業者の場合は極めて深刻である⁵⁾。こうした分断傾向の深刻化は、高齢化社会を支えるセーフティネットの不在を招くのみならず、他者への不寛容や世代

「ソリューション輸出国家」日本へ
——未来をデザインする力を

入賞作品

間対立を助長しがちだ。シニア世代からの知恵の継承が停滞し、異質な他者と交流する力が育たないことは、未来を担う若者世代の力が痩せ細ることを意味するし、外国人留学生や旅行者にとって過ごしにくい社会となれば、経済的にも文化的にも日本の損失だろう。それでは日本のグローバル化、世界への貢献など絵空事に終わる。その意味でも緊急に取り組むべき課題である。

解決の処方箋を書くことは容易ではないが、二つの方向性が考えられよう。一つは空間からのアプローチだ。異なる立場の人々が出会い、関わるようなコミュニティ作りが鍵となる。職任近接をしやすいような建築・都市デザインや、地域の学校や図書館といった小・中規模の公共施設をコミュニティの中心として機能させる試み（「よのなか科」等の試みで地域住民と学校生徒を結びつけた杉並区和田中学校は好例だろう）が有効となる。

もう一つは人材育成＝教育からのアプローチだ。相互扶助的なコミュニティの構築は、国家や大企業といった単一のアクターだけがイニシアチブを取れば実現するものではなく、あらゆる領域において、島宇宙を重層的に架橋するためのハブとなる人材が求められる。各分野をリードする専門性と、分野横断的に島宇宙同士の連関を意識し、つなげられる教養を持った人材を、異質な他者に対しても胸襟を開いてコミットメントできる寛容性と胆力を持った人材を、じっくりと育成してい

く必要がある。古典や歴史を通じた教養教育を大学教育で強化すること、日本人学生の海外留学を促進するための単位互換制度や奨学金の充実等は検討されるべきだ。また、日本へ来る留学生が学びやすい環境作りとして、すでに議論されている英語授業の充実も重要だが、せっかく日本語や日本文化を学んだ彼らが国内に定着し、活躍しやすいように、就職サポートや日本企業の職場環境改善も求められる。教育を通して、将来のコミュニティ作りをリードする層の厚い人材プールを構築していくことが、「人材の鍋」実現の鍵だ。

これらの取り組みは、先述の通り「課題先進国」によるモデル提示という意味で世界への貢献につながるが、それだけでなく、この国内問題解決プロセス自体が外国人も含めた多様な人材の導入・育成を経由するため、内と外をつなぐダイナミックな世界貢献戦略として効果的であろう。

終章

短・中・長期的な日本の戦略
——ソリューション輸出国家へ

最後に、東アジアの多面的安全保障へのコミットメントを通じた地球規模課題への貢献と、先進的課題に対応する社会デザインの提示、という上述のポジションを確立するためのロードマップを提示したい。（図2）

「ソリューション輸出国家」日本へ

——未来をデザインする力を

入賞作品

まず短期的には、外に対しては現行で比較優位に立っている環境技術等の移転を通して東アジア地域への貢献と日本の経済成長を担保する。一方、内に対しては国内課題解決のための相互扶助的な社会デザインを早急に進める。まずは高齢者と若者の架橋が喫緊の課題だろう。外からの人材受け入れも、短期的には技術・知的労働者、留学生など、能力が高く日本社会にも溶け込みやすい人材受け入れを優先する。こうして少子高齢化問題の解決を通じた国内安定化と新興国の人材育成を同時に達成し、今度は中期的に、先進的な社会モデルを新興国に輸出していく。ソリューション輸出国家とも言うべきポジションである。一方でその頃までには、労働力人口の不足に対して単純労働

の移民受け入れをどうするのか、中台紛争や北朝鮮崩壊のリスクも見越した軍事的安全保障をどうするのかといった、現在日本が避けがちな議論にも決着をつけなければならないだろう。これらを通して、日本を東アジアの中で独自かつ不可欠のプレイヤーとして確立していき、長期的には、アフリカの後発途上国も含め、地球大に応用問題を解く要領でソリューション輸出国家として打って出る。内から外へ、東アジアから世界へ、技術移転からソリューション輸出へ、そのようなフロントランナーとしての役割が、新興国には担えない日本独自のポジションなのではないだろうか。

図2 日本のポジション確立に向けたロードマップ



「ソリューション輸出国家」日本へ

——未来をデザインする力を

入賞作品

文中注

- 1) 小宮山宏『「課題先進国」日本—キャッチアップからフロントランナーへ』
- 2) 三浦展は、『ファスト風土化する日本 郊外化とその病理』pp.25-28で、郊外化の進展が均質な「ファスト風土化」を招いたと指摘している。
- 3) 宮台真司『日本の難点』pp.20-35、pp.134-136
- 4) 藤原帰一『新編 平和のリアリズム』pp.433-448
- 5) 広井良典は、『コミュニティを問いなおす』pp.17-18で、OECDの報告書を引用しながら、日本は国際的に見て最も「社会的孤立度」の高い国とされていることを指摘している。

参考文献

- ・東浩紀『動物化するポストモダン』講談社、2001年11月
- ・東浩紀『ゲーム的リアリズムの誕生 動物化するポストモダン2』講談社、2007年3月
- ・東浩紀・宮台真司『父として考える』日本放送出版協会、2010年7月
- ・アマルティア・セン『貧困の克服』集英社、2002年1月
- ・アマルティア・セン『人間の安全保障』集英社、2006年1月
- ・猪木武徳『大学の反省』NTT出版、2009年4月
- ・内田樹『日本辺境論』新潮社、2009年11月
- ・大江博『外交と国益 包括的安全保障とは何か』日本放送出版協会、2007年7月
- ・大村敦志『家族法 第3版』有斐閣、2010年3月
- ・クォン・ヨンソク『「韓流」と「日流」』日本放送出版協会、2010年7月
- ・草野厚『日本はなぜ地球の裏側まで援助するのか』朝日新聞社、2007年11月
- ・高賛侑『ルポ 在日外国人』集英社、2010年8月
- ・小宮山宏『「課題先進国」日本—キャッチアップからフロントランナーへ』中央公論新社、2007年9月
- ・堺屋太一『知価革命』PHP研究所、1990年6月

- ・佐藤学『学校の挑戦 学びの共同体を創る』小学館、2006年5月
 - ・篠田英朗『平和構築と法の支配』創文社、2003年11月
 - ・進藤榮一『東アジア共同体をどうつくるか』筑摩書房、2007年1月
 - ・ナヤン・チャンダ『グローバリゼーション 人類5万年のドラマ(上)』NTT出版、2009年2月
 - ・ナヤン・チャンダ『グローバリゼーション 人類5万年のドラマ(下)』NTT出版、2009年3月
 - ・ハンナ・アレント『人間の条件』筑摩書房、1994年10月
 - ・広井良典『コミュニティを問いなおす』筑摩書房、2009年8月
 - ・福沢諭吉『文明論之概略』岩波書店、1962年11月
 - ・藤原帰一『新編 平和のリアリズム』岩波書店、2010年4月
 - ・船曳建夫『右であれ左であれ、わが祖国日本』PHP研究所、2007年1月
 - ・船曳建夫『日本人論』再考』講談社、2010年4月
 - ・三浦展『ファスト風土化する日本 郊外化とその病理』洋泉社、2004年9月
 - ・ミヒヤエル・エンデ『モモ 時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとりかえてくれた女の子のふしぎな物語』岩波書店、1976年9月
 - ・宮台真司『日本の難点』幻冬舎、2009年4月
 - ・持田信樹『財政学』東京大学出版、2009年10月
 - ・Barry Buzan, Ole Waever, Jaap de Wilde, *Security: A New Framework For Analysis*, Lynne Rienner Publishers, Inc. 1997.9
 - ・Thomas L. Friedman, *The World Is Flat [Updated and Expanded]: A Brief History of the Twenty-first Century*, Holtzbrinck Publishers, 2006.3
- ウェブリソース
- ・芦田宏直「シラバスとは何か ——大学のシラバス主義には何が欠けていたのか 2009年02月02日」BLOG

「ソリューション輸出国家」日本へ ——未来をデザインする力を

芦田の毎日

http://www.ashida.info/blog/2009/02/post_323.html 参照2010年8月17日

- ・芦田宏直「ストック情報武装化論 第1回「オンライン自己」という現象」「BPnet ビズカレッジ：ライフデザイン」

<http://www.nikkeibp.co.jp/article/column/20100524/227559/> 参照2010年8月17日

- ・内閣府「新しい公共」円卓会議『「新しい公共」宣言』
<http://www5.cao.go.jp/entaku/odf/declaration-nihongo.pdf> 参照2010年8月23日

- ・外務省「日ASEAN学生会議 共同声明提出及び歓送レセプション(実施報告)」より、「ASEANと日本の将来のパートナーシップに関する仙台共同声明(本文)」

http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/jenesys/j_asean_0911.html 参照2010年8月17日

- ・Association of South East Asian Nations, *ASEAN POLITICAL SECURITY COMMUNITY BLUEPRINT*

<http://www.aseansec.org/22337.pdf> 参照2010年8月17日

- ・Association of South east Asian Nations, *ASEAN ECONOMIC COMMUNITY BLUEPRINT*
<http://www.aseansec.org/21083.pdf> 参照2010年8月17日

- ・Association of South east Asian Nations, *BLUEPRINT FOR THE ASEAN SOCIO CULTURAL COMMUNITY (2009-2015)*

<http://www.aseansec.org/22336.pdf> 参照2010年8月17日